

ラサリーラー
愛のマンダラ
『バガヴァタ・プラーナ』の物語より

第5部

森の中を探すゴーピーたち

「クリシュナはどこ？ クリシュナを見なかった？」 と、森のあちこちに広がってゴーピーたちは叫びました。「クリシュナ！ クリシュナを見なかった？」 と、木々に、鳥たちに、花々に、川に、地面や空に、月や星々に、彼女たちは叫びました。すると、木々や鳥たち、動物たち、花々、川、地面と空、月や星々が答えてささやきました。

「私たちはすべて神の形です。私たちを愛しなさい。そうすれば彼は見つかるでしょう」

最初、少女たちにはそれが聞こえませんでした。あるいはもし聞こえていたとしても、そのことに注意を払いませんでした。まだ彼女たちは、りりしい牛飼いのクリシュナだけが自分たちの切望をかなえてくれると信じていたのです。そして、りりしい牛飼いの姿をしたクリシュナはどこにも見つかりません。時間が過ぎるにつれ、ゴーピーたちは疲れ果て、さらに悲しみに打ちひしがれました。

一方、ラーダーは川岸の突き出た空き地に戻る道を見つけていました。彼女はそこで静かに腰を下ろし、これまでに起きたことすべてをじっくりと考えました。彼女はクリシュナへの愛に没頭していました。その愛は、全能で、この世とそれを超越したすべてを含んでいるかのように、とてつもなく大きく感じました。そしてそれはこの上ない至福にあふれています。なぜ、どのようにして、それは失われたのでしょうか？

彼女がそう問い掛けるや否や、答えはそこにありました。彼女が、クリシュナの本質を理解できるのは自分だけだと思ったその瞬間に、それは突然消えてしまったのです。その独占的で傲慢な考えで、彼女は自分自身を神の愛を体験することから断ち切ってしまったのです。

「もう決して」と、彼女は言いました。「もし再びそのような体験を得る栄誉を与えられても、決して私だけのものとは思いません。あなたはすべての神なのですから。誰もあなたを独占することはできません。あなたを所有できる人はいません」

再び、クリシュナ神の声が聞こえました。

「内側を見なさい。私はあなたの中に、そしてすべての場所にいる」

初めはその言葉が理解できなかったもので、彼女は自分自身に何度もそれを繰り返し、自分の中でそれらが波紋のように広がるのを待ちました。

彼女がそうすると、クリシュナ神は彼女のマインドの目の中に現れました。きらめく黄色の絹の衣、輝く黒い肌、髪にはクジャクの羽を付けて。計り知れない感謝の気持ちが彼女の中に湧き上がりました。彼女は心の中で、トゥルシーとジャスミンの花輪でクリシュナ神を飾り、プラナムをしました。クリシュナ神に拝礼し、彼への奉仕に自分の人生をささげることができるようにと懇願しました。すると、クリシュナ神は彼女にほほ笑み、そして再び、彼女の全存在は愛で満たされました。ラーダーは、ちょうどクリシュナ神と踊った時のように満ち足りて、紛れもなく完全に満たされていると感じました。

そして今、彼女は分かったのです。愛、至福、そして完全性の体験は、自分の中に存在しているのだと。それこそがクリシュナでした。今、彼女は、神は自分の中に——そして自分の周りのすべてに——存在していると分かったのです。



© 2023 SYDA Foundation®. 著作權所有。